

教育学研究科・グローバル教育展開オフィス

瀧口 翔太

国際学会：31st International Congress of Applied Psychology

参加地・期間：イタリア・フィレンツェ 2026年7月21日～25日

発表題目：Awe After Mortality Salience: Differential Effects of Positive and Threat Awe on Defensive Responses

成果の概要

本支援を受け、2026年7月21日から25日にかけて、イタリア・フィレンツェで開催されたInternational Congress of Applied Psychology 2026 (ICAP 2026)に参加しました。ICAPは4年に一度開催され、社会心理学、教育心理学、産業・組織心理学をはじめ、幅広い分野の研究者が世界各国から集う大規模な国際学会です。大きな学会でしたが会場には研究分野や立場を越えて気軽に意見を交わせる開かれた雰囲気があり、多様な研究者と交流することができました。

本学会では「Awe After Mortality Salience: Differential Effects of Positive and Threat Awe on Defensive Responses」という題目で発表しました。本研究は、死を意識することによって生じる心理的脅威に対し、畏敬の念を喚起することが防衛的反応にどのような影響を及ぼすかを実験を通じて検討したものです。特に、近年では畏敬の念の種類の違いが重要視されており、本研究ではその種類によって先述の防衛反応への影響が異なる可能性について着目しています。発表準備から発表、質疑応答を通して、研究結果の解釈や今後検討すべき課題について、多様な観点から示唆を得ることができました。特に私の研究テーマは文化差が重要な論点としてとして広く検討されています。そのため、さまざまな文化的背景を持つ研究者や近い専門の研究者が集う場で研究を発表し、意見を得られたことは非常に意義深い経験となりました。

自身の発表以外にも畏敬、宗教、スピリチュアリティ、文化心理学など関連する発表や講演にも参加しました。私が詳しく知らない文化や宗教に関する近接した研究を聞き、自身の研究を国際的・文化比較的な視点から捉え直す契機となりました。各セッションや発表会場では、自身と近い研究領域の研究者だけでなく、同じ心理学でも専門が大きく異なる方々とも、研究テーマや方法論について幅広く議論する機会を得ました。異なる専門的背景を持つ研究者と意見を交わすことで、自分の研究領域の中だけでは得にくい視点や研究方法について学ぶことができました。同時に、私自身の研究や方法論についても相手に紹介し、それぞれの研究にどのように応用できるかを検討するなど、互いの研究に影響を与え合う良い交流となったと思います。

これらの活動を通じて、心理学の諸分野をリードする研究者を含む多様な参加者と、幅広く深い関係を築くことができました。実際に文化比較に関する共同研究への誘いも得られ、今回のつながりは、今後の情報交換や共同研究の可能性を広げるだけでなく、自身の国際的なキャリア形成においても重要なものとなりました。

ここまで述べた経験を得ることができたのは、本支援をいただいたからにほかなりません。海外で開催される国際学会への参加は、金銭的な負担だけでなく心理的なハードルも大きく、修士課程の学生が独力で実現することは容易ではありません。本支援により、渡航や学会参加に伴う負担が軽減され、研究発表と研究者との交流に集中することができました。大学院生の段階で、自身の研究を国際的な場で発表し、議論し、つながりを得られたことはかけがえのない経験だと感じます。今回得られた知見とつながりを、今後の研究に活かしていきたいと考えています。